立教大学 社会福祉ニュース 第25号 2005年9月

第25号　2005年9月30日　　編集発行　立教大学社会福祉研究所　東京都豊島区西池袋3-34-1

社会福祉研究所のこれからを考える
～所長就任にあたって～

所長　庄司洋子

今年度はじめから、前任の福山清蔵先生のあとを引き継ぎ、所長をお引き受けすることになりました。これまでひとえに学内外の所員・研究員を中心とする皆様のご協力によって支えられてきた社会福祉研究所ですので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

私が１５年くらい前に立教大学に着任しました頃の福祉研とくらべ、現在の福祉研は大きく変わっております。とりわけ、学内にそれぞれの経緯と条件をもって存在している多くの研究所が、数年前から立教大学総合研究センターという組織のもとに参集することになり、研究センター委員会を通じて各研究所の状況を知るようになりました。また、そこで福祉研の組織や活動を知ってもらうと同時に、自らの位置を確認することができ、そうしたなかで、福祉研が抱える課題もいくつか見えてきているように感じているところです。

組織面でいえば、現在の規程では同じ所員となっている学内所員と学外所員の役割分担を明確にしていく必要があります。重要な決定は、すべて学内所員会を通じて行っておりますので、そうした実情に見合った組織規程としなければならないでしょう。並行して、これまでの長い福祉研の歴史のなかで大きな役割を果たしていただいてきた学外所員の方々には、今後どのような役割をとっていただけるか、積極的に検討したいと思います。また、研究活動の活性化を期して創設された研究員制度についても、一定期間を経た現在、点検と評価が必要になっていると思います。おそらく、今後は、学外者も含めて研究員の機関誌への投稿等をいっそう強く奨励する必要があるでしょう。

なお、福祉研の学内所員の構成は多岐の学部にわたっており、大変恵まれておりますが、今後は、さらに働きかけを行い、拡充をはかりたいと思っております。このことは、おのずと、各研究科の大学院生の研究員としての参加を促すようになるでしょう。

セミナー・講座・相談室活動・機関誌・ニューズレター・ホームページ等のありかたを点検し、改善をはかるためには、今後、学内所員会の定例化や、学内・学外を含めた所員・研究員の積極的な意見交換など、さらなる努力が必要です。こうした課題意識をふまえて所長として最善を尽くす所存ですので、所員・研究員の方々はもとより、広く福祉研にかかわるすべての方に、ご協力とご支援をいただけますよう、心からお願いいたします。

《講座受講報告》

第 10 回対人援助セミナー 2004 年 7 月 24 日(土)開催

「カウンセリングマインドの体験レッスンＰａｒｔⅥ ～今までの私と今の私～」に参加して

介護老人保健施設グリーンヒルズ藤枝
支援相談員　鈴木 里美

はじめに

この夏の猛暑に漏れ違わない１日であった平成１６年７月２４日（土)、立教大学池袋キャンパス７号館にて、第１０回対人援助技術セミナーが開催されました。講師は、主催である立教大学社会福祉研究所所長でもあられる福山清蔵教授で、「今までの私と今の私」をテーマに、主として作業や参加者相互のインタビューを通じレッスンが行われました。

参加者は、２０名弱で、うち男性が３名。２０代から７０代まで、学生・一般企業勤務・対人援助職従事者など様々な層の方々の集団となりました。

私自身は、同研究所主催対人援助技術セミナーへの参加は２度目。日頃、介護老人保健施設で支援相談員として対人援助を業務としていますが、日常の中で自己研鑽の場を希求しているとともに援助の過程でいかに自己覚知が重要であるかを感じており、このセミナーがひとつの機会となればと期待し、参加しました。

レッスンの概要

「私と貴方は、今日初対面です。貴方は私のことを知っているといえるでしょうか？いつになったら貴方は私を知っているといえるのでしょう？」

レッスンは福山教授のこんな問いから始まりました。

「では、自分を知っているということはどうしたらいえるでしょうか？」

「知っている」という言葉。普段何気なく使っていますが、このように問われ、はたと私だったらどう返答するだろうか。思考が混乱しました。

また、逆転移についても「自分がある人を嫌いだと感じても同じ人物に対して嫌悪感を持たない人もいる。嫌いと思うのは、自身にそう思う要因があるためでもある」と説明があり、改めて自身の価値観またそれが形成された経緯をできるだけ認識しておきたいという気持ちが高まりました。

過去から現在に私という存在はつながっています。そして未来へ。過去からの自身を見つめなおすことで自分を知る。このレッスンは紙を使った作業「私の数字」「人生曲線」「間取図」「身体の記憶」や相互インタビューを通じ、それを体験することができるものでありました。

セミナー当日の様子→

レッスンの内容

＜私の数字＞

「自分自身をあらわす数字、私の数字をひとつ書いてください。」福山教授にそう言われた瞬間、私の頭は真っ白になりました。自分を象徴する数字？そんなこと考えてみたこともない！とかなり戸惑いました。参加者のなかには瞬時にインスピレーションが湧いた方もいらっしゃったようですが…。

なんとか書き上げた数字を自己紹介しながら発表し合いました。数字を決めた理由としては、誕生日・名前に入っている数字、節目を感じる年や年数、ただ漠然とインスピレーション等々が挙がりました。なかには、「まず思いついたのがラッキーセブン。ラッキーセブンといえば７７７。で自分は向上心が強いので１０まで目指すため７７７に８・９・１０をつけた７７７８９１０が私の数字です。」とかなり考えぬかれた答えの方もいて、発表された数字自体よりもなぜその数字にしたのかという理由が十人十色で興味深く、ただ自己紹介するよりとても印象でした。

＜人生曲線＞

今度は紙を横長に置き、まんなか辺りに一本の直線を引く。上側が楽しい・嬉しい等「快」の気持ち、下側が悲しい・怒り等「不快」な気持ちとして、当時の気持ちがどうであったかを直線が年齢をあらわす軸とみなし０才から現在までを曲線にして表現するというものでした。

過去の記憶を古い順に引出しながら、その時どんな気持ちだったか思い返しながらの作業。なかなか１回では思うような曲線が書けず、何度かの修正が必要でした。

その後、今の自分に影響を与えていると思われる時期３箇所に影響の強い順から「☆☆☆」「☆☆」「☆」と印をつけ、参加者がペアを組み相互に話を聞き合いました。

福山教授からは注意事項として、「人間、人の幸運というはそう興味が惹かれるものではありません。が、話すほうは話したいものです。聞いてあげてください。不幸は、その不幸にだけ興味を持って聞くのはワイドショーと一緒です。そこからどう立ち直ったのかを重視して話しを聞いてみてください。」と。

私とペアを組んだ方とは、発生した年齢は異なるものの３つ中２つの☆印に類似点があり、①自分自身を意識・内省し始めた頃②社会人になり今までの価値観や常識が覆る思いをした頃が今の自分に影響を大きく与えた時期としていました。どちらも不快の分野に曲線はあり、思い出すのもイヤな時期であると話しにもでましたが、「おかげで今の自分はたくましくなれた」と笑い合えました。

相互インタビュー後、感想発表があり、曲線が二重になってしまったという人、このように自分の人生を捉えるのが初めてで作業にかなり戸惑ったという人、平坦な曲線で自分で大変なことはなかったと抑制している自分を感じたという人など様々な意見が述べられました。

＜間取図＞

次の作業は、自分が小学３・４年生のときに住んでいた家の間取図をできるだけ細かく書くというものでした。頭のなかでタイムスリップし当時のことを懸命に思いだしながら、紙に描いていきました。思ったよりも意外に覚えているもので「そういえばあそこに電話があった」とか「ミシンがここにあった」とか忘れかけていた記憶も蘇ってきました。

書きあがった間取図に色紙を切って作った家族を配置し表現。当時の家族の情景も浮かび上がってきました。また、当時の自分がどう感じていたのか書き出す作業を行い、①友達について②先生について③親をどうみていたか④親からどう見られていたか⑤熱中していたこと⑥（当時の自分を）わかってあげたいこと⑦当時の私に言ってあげたいこと⑧当時の私から今の私に言ってあげたいこと⑨象徴的気分⑩今の自分との相違点と共通点に答えていきました。ところどころ推測にはなりましたが。

そして、できあがった間取図をもとに再び相互インタビューを行いました。

＜身体の記憶＞

最後の作業は、紙に人のかたちを描き、自分の体に関する記憶、例えば病気やケガ、コンプレックス等を思いつくままに書きこんでいくものでした。

最初はなにを書いてよいのかわからずなかなかペンが進みませんでしたが、福山教授が自身の経験など例に挙げ説明してくださり、突破口が開けると不思議なほどスルスル思いつきました。比較的健康には自信があったものの振り返ればそれなりに記入できる病気やケガがあり又「外見なんて気にしない」と強がっていても結構他人から言われた一言に一喜一憂している自分を改めて認識しました。

レッスンの最後は、３人組になりレッスンを通じての感想を話し合い終了となりました。

おわりに

このレッスンを通じ一番印象的だったのは、再三にわたり福山教授が「（レッスンで行うことは他人に見聞されるので）隠したいことは隠して話してください。ごまかして書いてください。後で自身で振り返ってくだされば いいですから。」とおっしゃっていたことです。自分は普段そこまで配慮して話しを聞いているだろうか？話したくないことは話さなくてもいい自由をきちんと伝えられているだろうか？と考えさせられました。

また、このレッスンは作業等により自身を知る体験をするものでありましたが、併せて参加者が「認識している自分を知ってほしい」「（自分は）ちゃんと認識できているのだということをわかってほしい」という欲求を発露する場であったような気もします。

最後に、講師の福山清蔵教授及びこのレッスンを開催してくださった立教大学社会福祉研究所のスタッフのみなさまに感謝いたします。ありがとうございました。

《研究のまなざし》

児童虐待の行方

所員　福山清蔵

連日にわたって報道が相次ぎ毎日暗い気持ちでいるこのごろです。先日は福岡で「虐待」のセミナーが行なわれていたのですが，その福岡で同時期に起きていた虐待死事件が報道されたのはなんという皮肉かと思います。

このところのメインテーマは「虐待の定義」から「虐待の発見」へ，そして「虐待のケア」といったところまでわが国での対応が進行してきています。

＜処遇とケアの二つの方向として＞

児童相談所での「発見」から「介入」「分離」，そして児童養護施設への入所措置という方向での「隔離」「生活保障」と，そこまでの対応の遅れからの殺人・傷害事件としての報道が今もって相次いでいる現状からは，それ以降の対応にまでたどり着くことの困難さが心配されます。つまり，まだまだ「発見」と「分離」レベルでの対応に苦労しているといえます。現在の私の関心は「被虐待トラウマのケア」と「虐待家族のアセスメント」ですが，その観点から言えばここ１，２年のわが国のこの問題への関心は「児童養護施設におけるトラウマケアのあり方」と「家族再統合へのプログラムの開発と展開」であるといえます。

さて，一番多い被虐待処遇先は児童養護施設ですから児童養護施設内での対応が大きな課題となっています。この問題は法的整備の進行で多くの子ども達が発見され，施設での生活を支えられようにはなっていますが，彼らがそれまでに受けてきた「心の傷」を何とかしなければというところから生じているのです。

これまで私の専門的立場である「臨床心理学」では「施設内ケアの臨床的方法」としての蓄積がほとんどないところにも問題があります。幾人かの専門家によって細々と取り組まれてきたに過ぎませんでした。暴力によってつくられた心身の傷に対しての対応への本格的な関心はつい近年向けられ始めたもののようです。

しかも，児童虐待という小さな子ども達の心身に与えられた「歪み」や「痛み」が成長過程においてどのように持ち越されるのか，巷間伝えられている「世代間伝達」はどのようにして子ども達の心に持ち込まれるのか，はたまた彼らの人間関係形成上のどこに，どのようなトラブルとして現れやすいのか，彼らが「愛」や「依存」といった感覚をどのようにして取り戻し，回復せしめることができるのか。

近年では「愛着障害」という概念が提唱されていますが,「愛着する力」そのものに障害があるのか,「愛着の方法や表現」に障害があるのか未だ明確にはなっていません。

その辺が明確化されることで「家族再統合」の課題は道筋ができていくものと考えられています。

この問題は「児童福祉」の問題というよりも「女性福祉」「家族福祉」という方向での取り組みが求められていくと思います。事実「女性自立支援施設」の様子を聞くとき，女性の生き方，家族の生き方，そして人間の生き方という観点から問題の大きさを痛感しています。

第25号 目次

【緒　　言】　社会福祉研究所のこれからを考える／庄司洋子・・・・・ 1
【講 座 受 講 報 告】　第 10 回対人援助技術セミナー／鈴木里美・・・・・・・・・2
【研究のまなざし】　児童虐待の行方／福山清蔵・・・・・・・・・・・・・・・ 5
【2005 年度活動予定】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

2005年度前期活動報告

5 月　9 日　所員会
5 月 30 日　公開講演会
「社会的ケアの領域における福祉ミックス―国際比較の視点から―」
講　師：マイケル・ヒル
(ニューカッスル大学名誉教授・ブライトン大学客員教授)
通　訳：小舘尚文 (東京大学 21 世紀 COE 特任研究員)
司　会：武川正吾 (東京大学教授)
討論者：木下康仁 (社会福祉研究所所員)
7 月 19 日　所員会
7 月 23 日　第 11 回対人援助技術セミナー
「カウンセリングマインドの体験レッスン PartⅦ　～ロールプレイ～」
講師：福山清蔵 (社会福祉研究所所員)

2005年度後期活動予定

10 月　所員会
11 月 26 日　第 13 回家族援助技術セミナー
(日程未定　連続公開講座　社会福祉のフロンティア)
12 月 10 日　公開講座　質的研究法
1 月　総会
3 月　紀要「立教社会福祉研究」第 25 号発行

社会福祉ニュース　第 25 号
2005 年 9 月 30 日発行
編集発行　立教大学社会福祉研究所
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
tel 03-3985-2663　fax 03-2985-0279
e-mail:r-fukushi@grp.rikkyo.ne.jp
homepage:http://www.rikkyo.ne.jp/grp/r-fukushi/